|  |
| --- |
| こころころころ202５，７,１（火)　鳴門中学校　　　　　ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ通信　　　　竹口佳昭 |
| 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「待つ」「待つ」ことは，相手を理解し，成長を促すことになります。スタニスラフスキーの『俳優修行』という本に，次のようなことが書かれています。演出家が俳優に「歩きなさい」と指示し，俳優は歩きます。その歩き方を見て，そばから演出家が「そんなふうに歩く人がいると思うかね？」「目の付け所が悪い」「もっと自然に」と立て続けに言うのです。俳優は，だんだんとコチコチになり，動けなくなってしまいます。つまり，正しいことをどんどん言われると，人は緊張して固まってしまうことがあるのです。大人は子どもに比べ，長い間生きてきて，たくさんの経験をしています。子どもにその豊富な経験を伝えたいと思い，様々な経験を子どもたちにたくさん伝えます。余裕のある子どもは，その素晴らしい経験をどんどん受け入れることができます。しかし，余裕のない子どもにとっては，その素晴らしい経験を聴くことが苦痛に思えてしまうこともあります。さらに付け加えると，指示や教示を与えるのはエネルギーをあまり使いませんが，聴くという行為はエネルギーを大量に消費します。　私たち大人は，子どもたちが今，何を考えているか，どういうことを欲しているかを十分理解したうえで，関わる必要があります。そのためには，子どもの“こころ”の声を聴く＝傾聴が大切になります。　あるお母さんが，自分の子どもと子どもの友だちに絵本を読んだそうです。するとその友だちが「その本読んだことがある！」「次，主人公，屋根から落ちるんやろ！」と，邪魔をするそうです。なんと嫌な子だろうと思いながら絵本を読み終わると，その友だちは「今度は私に読んで」と言ったそうです。『そうなんや。今の絵本の読みは，私の子どものためのように感じ，傍にいる友だちは読んでもらった気がしなかったんだ。だから，とても寂しくて邪魔せざるをえなかったのだ。』それに気づいたお母さんは，その子を嫌いにならずにすんだそうです。その友だちは自分の気持ちを分かってくれそうな素敵なお母さんだったので，自分の気持ちを伝えることができたのでしょう。　子どもが赤ちゃんの時は言葉が話せないので，「なぜ，泣くのだろう？」と子どもの気持ちを知ろうとします。しかし，子どもが話せるようになると，子どもの口から出た言葉で気持ちを判断するようになります。次に，だんだんその言葉をせかせて出させます。それは，大人の都合（忙しい）でそうせざるを得ないからです。子どもは，せかされて“こころ”の奥にある本当の気持ちを発していないのかもわからないのに，私たちはその言葉を子どもの本当の気持ちだと疑うこともなく，信じて行動しているのではないでしょうか。　正真正銘，待つと言うことは，すごく難しいです。黙っている相手がいつしゃべるか，いつしゃべるかと思っているのでは，全然待っていることにはなりません。子どもにその気持ちが伝わってしまうのです。“こころ”が「ちゃんと待っている」「ちゃんとここにある」ことは，本当に難しいです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　参考引用図書　「こころの子育て」　河合隼雄著　朝日新聞社７月来校予定４日（金）　・　１８日（金）　　　　　１０：０0～1６：００　　　　　　　　　　 |